

## 吃音について考え、表現する活動への取り組み ～ナラティブ・アプローチと当事者研究の視点から～

鹿児島県知名町立知な小学校 溝上 茂樹

### 1 はじめに

大学を卒業し、一度は一般企業に就職したどもる私が、教員になり、さらにことばの教室の担当を目指そうとしていた当時、私自身は、どもることにジレンマを感じ、まだ劣等感も持っていた。ただ、そんな自分だからこそ、どもる子どもたちをそのまま受け止められるのではないか。今のままの私が教員になることで、「どもって気にすることがあっても、大丈夫」、「話すことの多い先生にもなれる」、「どもりながら、いろいろなことができる」と、子どもたちに伝えられるのではないか。さらに、どもりを受け入れようとしつつも、まだ迷いのある私自身を、前に進めてくれるのではと思っていた。

田舎の小さな学校に通っていた私は、まわりから、ごく自然にどもることを受け入れられ、いじめや、からかいもなかった。そのためか、どもる毎日の中で、嫌だなあ、治らないかなあと思っても、それが強い劣等感や、辛さにはならなかった。どもりは簡単には治らなそうだし、子どもの時代はどもっていてもいいが、将来に対しては、どもることを漠然と恐れ、しゃべることが多い仕事、たとえば学校の先生は無理だと思うなど、自信のない、不安でいっぱいだった。

教員になった私は、クラスの子どもたちには「先生、どもるんだ」と伝え、卒業式で言いにくい子どもの呼名に苦勞する経験をしながらも、何とかやっていた。ただ、どもっている自分を認めつつ、教員をしていることが自信に繋がらなかった。

そんな中、日本吃音臨床研究会主催の「吃音親子サマーキャンプ」へ参加したことが、私の転機となった。このキャンプには、生き生きと自分のどもりを語る子どもに加えて、スタッフとして参加した大人たちの同じように語る姿があった。話し合いや作文、劇などキャンプの柱となっている活動を通して、子どもも大人も自らのどもりと向き合い、しっかりと悩み、自分の問題として取り組んでいることが分かった。その自分のどもりをありのままに口に出し、どもっても大丈夫と自然体で生きている姿に、何とも言えない魅力を感じ、心を揺さぶられた。子どもたちは、それまで私が考えていたような、かわいそうな弱い存在ではなかった。むしろ尊敬できる存在だった。大人である私も、あんなふうにともりたいと思える魅力的な子どもたちに出会ったことで、自分の進む方向に確信を持った。

### 2 自分のどもりについて考え、語る力をつけたい

「吃音親子サマーキャンプ」へ参加し、自分の吃音をすごく語る子どもたちを目の前にした時、私に課せられた課題は、自分自身を語ることばをみつけることだった。私は、子どもの頃から、大きく悩むことなく、何となくやってきたが故に、自分や自分の吃音と向き合いきれずにいたのだ。

キャンプ2日目、子どもたちの話し合いのファシリテーターをすることになり、私は、自分自身の吃音を子どもたちに話し始めた。そうすると、それに呼応するように、子どもたちからもたくさんのことばが出てきた。その経験から見えてきたことは、子どもたちは語る力を持ち、自ら語ることで、吃音に対する様々な考え方や生き方に、互いに触れ合うことができるということだった。

どう生きるかを見つめるためには、考え、語るが必要だ。「吃音とともに豊かに生きる」ためには、自分のどもりにしっかりと悩み、語る力を育成することが大切だと考えた。この私自身の気づきがベースになり、当事者研究やナラティブアプローチの捉え方も取り入れて実践を続けている。

### 3 どもりをみんなに知ってもらおう—Aさんとの実践—

Aさんは3年生の女子で、通級を始めた頃、なかなか自分の考えや思いを話せなかった。また、話

すのを途中でやめたり、答えが分かっている手も手を挙げないなど、吃音が行動面に影響していた。さらに、「友だちが少ないのは、どもるからだと思う」「どもりが治らないと将来楽しい人生は送れない」「身近な人にどもりをできるだけ知られたくない」など、吃音を否定的に考えている様子もあった。

#### (1) どもることをまねされる

Aさんにとって、どもりで困っているのは、遊んでいる時に、「なななにしてお遊ばす」と言ったことをまねされたり、発表した時に「変なしゃべり方だね」と言われたりすることだった。さらに「Cさんだけが、まねしたり嫌なことを言う」「Cさんは、いいところは一つもない。他の友だちもそう思っている」と、からかうCさんへの思いをぶつけてきた。そこで、Cさんがどういう人が詳しく話してもらおうと、いろいろ文句を言いつつ、ふと「Cさんは転校生だから私のことをあまり知らない」という気づきが生じた。すると、Cさんに対する嫌悪感が薄れ、私のことをよく知らないから、意地悪をするのかもしれないと思いはじめた。さらに、「クラスの友だちは、まねをしたらだめだよとってくれる。味方もたくさんいたことも分かった」と、話し始めた。こうした一連の会話の流れが、ナラティブ・アプローチという「ユニークな結果」を見出し、新しい物語を紡ぎ出すことなのだろう。

その一方で、みんなが味方をしてくれるのは、「ことばの教室に行っているのに、いじめたらどもりがひどくなると思っている」「みんな、私のことかわいそうと思っている」と話すなど、自分は人よりも劣っているという意識も伺えた。そこで、「ことばの教室に行っているのは知っているけど、Cさんも、みんなも本当はAさんのどもりのこと知らないよね」と、投げかけ、吃音を知ってもらうために、どのような方法があるか、話し合った。Aさんからは「クイズにすると、みんなもよく分かる」というアイデアが出され、自分の知って欲しいことを、クイズ形式にまとめることにした。

Aさんは、どもるのは自分だけじゃないことや、原因や治療法が分かっていないこと。さらに自分はいつもどもるわけではなく、どもりやすい音があることなど、伝えていた。さらに自分がして欲しくないこともみんなに考えてもらい、自分の思いを知ってもらうことが、かなりできたようだ。どもりクイズをクラスで実施した後、Aさんは「みんながちゃんと聞いてくれた」「クイズにもちゃんと答えてくれた」「みんなが手紙をくれたからよかった」と感想を話した。また、友だちからの感想の手紙に「どもりのことがよく分かったよ。Aさんが教えてくれなかったら笑っちゃってたかもしれないよ。教えてくれてありがとう」とあり、どもりをまねされることについて「初めてあった人にまねされても仕方ないけど、優しく、やめてねと言う」と話していた。悪意でまねをするだけでなく、どもりを知らないことで、つい笑ってしまうことがあることにも気がついたようだ。

#### (2) 吃音について考え、表現する

どもりのクイズを経験したことで、どもりのことを話したいという意欲が高まった。その様子が、Aさんのちょっとしたことばの中に表れているように思う。

##### ① 授業中の発表

「サーカスのライオンの発表する時に、ライオンのじんざは空高く駆け登り消え去ったってところを、『そそそら高く』とかなった」と授業中の具体的にどもった場面を挙げ、その時の気持ちの変化について教えてくれた。そして「最初は嫌な気持ちだったけど、そのまま全部の文を読んで、読み終わったときに『その考えと同じです』などのことばを、たくさん友だちが言ってくれたので、最初の嫌な気持ちからだんだん普通の気持ちになった」と話していた。クイズの中でお願いした「ちゃんと、最後まで聞いてほしい」ことに、友だちが応えてくれることが確かめられたようだ。

##### ② どもりカルタ

自分の好きな「どもりカルタ」について話し合った。Aさんは「大人になったどもる人、いろんな仕事についている」を選び、その理由を「アナウンサーや有名人に自分はむいていないと思っていた。例えばアナウンサーだったら仕事の時にどもるとそのままテレビに映って、笑われたり、からかわれたりすると思っていた。だけど、どもる人たちが、話す、みんなに伝える仕事をしているのを知って、アナウンサーや有名人はたくさん話しながら仕事をするからたいへんだと思うけど、その仕事を自分

もできるかもしれない、してみたいなあと思えるようになったから」と話した。

### ③ どもるかもという心配と人前で話したい気持ち

Aさんは、どもることが心配で積極的に人前で話すことができない気持ちと、人前で話したい気持ちについて、3年生と1年生の時を比較して、円の大きさを表現した。「1年生の頃はあんまり自信が無かったけど、3年生になったら、どもっても間違えじゃないと思えるようになった。そうしたら、話したい気持ちの円も大きくなった」「今はどもっても話を続けると、相手に通じるから、途中で止まるんじゃなくて、そのまま続けている。だから、心配の円は小さくなっている」と話していた。

なかなか自分のことを話せなかったAさんは、「どもりのクイズ」をきっかけに、どもりや自分について語り、知ってもらうことが自分の生きやすさにつながるをことを掘り始めたように思う。

## 4 吃音を外在化する—Bさんとの実践—

Bさんは5年生の女子で、話すことが好きで、人前で発表したり、表現したりすることに積極的に、率直に自分の思いを語ることができる。吃音の影響をあまり受けず積極的に行動しているように見えたが、吃音に対する考えは「どもらなかつたら、学校生活はもっと楽しい」「大人になってもどもっている人はかわいそう」「どもりはぜったいに治さなければならない」など、否定的に捉えているものが少なくなかった。自分から吃音のことは話せないが、どもるのがわざとしていることだと誤解されたり、最後まで話を聞いてもらえなかったり、まねされたりすることが嫌なので、身近な人には自分の吃音のことをちゃんと知ってもらいたいと思っていた。

### (1) 出来事を外から見る、考える

Bさんと吃音で困った場面について、4コマ漫画的なイラストを描きながら話し合った。彼女はイラストが得意で、また描きながらの方が話しも活発になることから、まずはたくさん話すことを目的に行った活動である。何度かこの活動を行っていくと、イラストにする前と後では、問題に対しての捉え方や困り感が違ってくる様子が見えてきた。これは、彼女の中にある問題を、自分の外に出し、担当者と一緒に眺め、考えるという、ナラティブ・アプローチの技法である「問題の外在化」をしている経験だった。そして、それまではどうにもできないと思っていた困った場面が、担当者との共同作業の中で、自分の力で何とかできるかもしれないものになっていった。

例えば、横断歩道で交通指導の人にお礼を言う場面について話し合った。最初の頃は「ありがとうのことばが出なかったのが嫌」と話していたが、イラストを描きながら一緒に振り返ると、自分自身をその場にいた登場人物の一人として見たり、まわりの人の気持ちや考えを想像しやすくなった。そして、声は出なかったけれど、ちゃんと会釈はしてたし、ありがとうの表情もできたことが確かめられた。最後には「7人の中に混ざっていたから、ありがとうの気持ちは伝わったと思う」と話していた。

外在化しただけで問題が捉えやすくなるわけではない。ここでのポイントは、〇〇の問題で困っているBさんから、問題と自分を切り離し、その切り離された問題を、あたかも誰か他の人の問題のように眺め、自分以外の人と一緒に、同じスタンスから考えることにある。すると、自分の中にある時はどうすることもできないけれど、外に出して眺めていく中で、新たな気づき生まれ、その分ちょっと前に進めむことができる。これは、自分の問題を、誰かに任せるのではなく、自分が中心になって「当事者研究」することでもある。

### (2) 自分の吃音をキャラクターにする

このような取り組みをする中で、Bさんは自分の吃音を「もっちい」というキャラクターに外在化した。私が「先生は自分のどもりのことを親友みたいに思って、『どもちゃん』と名前を付けている

【図1】 お礼場面のイラスト



んだよ」と話したことがきっかけだった。自分のどもりを嫌なもの、やっつけてしまわなければならない悪者のような存在と考えるか、いつも身近にいて寄り添ってくれる親友のような存在と考えるかでは、吃音に対する向き合い方は違ってくる。

【図】 B児が描いた「もっちい」

Bさんは、児童代表として全校児童の前で発表する日の朝、練習をした時のことについて次のように話した。

担当 「今日の朝、練習するときはどうだった？」

B 「緊張しすぎて、おなかが痛かった。『目がきよろきよろしてる』って言われた」

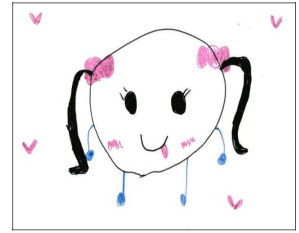
担当 「そんなときに、『もっちい』は、『やめといた方がよかったんじゃないの』とか言ってこないの？」

B 「言う。言う」「でも『やっぱりやる』と言うと、『まあ、やめた方がいいと思うけど、がんばって』と言ってくれる」

担当 「Aさんがやりたいと言えば、『じゃあがんばって』と言ってくれるんだ」

B 「そう。応援団みたいな感じ」

Bさんは、「もっちい」を日々の悩みや課題について一緒に語り合う相手として捉えた。どもりをキャラクターに外在化して話し合うことで、自分のどもりに対する新たな気づきが生まれた。



## 5 おわりに

自分の考えや思いをなかなか話せなかったAさんは、「どもりをクイズにする」の学習を通して、少しずつどもりのことを話し始めた。そんな彼女に、「仕事をするようになって、Aさんのことを知らない人が増えた時にどうする？」と問いかけると「友だちがいる会社に入って、その友だちにどもりのことを教えて、忘れるかもしれないから、もう一回教えて、知ってもらおう。そして、友だちの知っている人とかに言ってもらおう」と返答してきた。そう言えるようになったのは、彼女がどもりのことを知ってもらおうことは簡単ではないが、何とかできるかもしれないと考え始めたからだろう。

自分からどもりのことは話せないと言っていたBさんは、宿泊学習での自己紹介に不安を抱いていた。宿泊学習には他校の子どもたちも参加していたからだ。どうしたらいいか考えたAさんは自己紹介の前に、自分がどもることやどもることへの不安を、他校の子どもたちに話した。そして少し安心して自己紹介をすることができた。AさんもBさんも自分のどもりのことについて語ることで、自分が生きやすい周りとのかかわりを自分自身が主体となって作ることができた。二人との実践を通して、どもりが、豊かに生きるためのテーマになることを改めて実感した。

二人とも、どもっていても、何とかやっている自分に気づいている。「まあ何とかなる」、「今までも何とかやってきたし、これからも何とかなる」と思っているが、やっぱりどもりを強く意識する場面では、すごく不安を感じることもある。そんな子どもたちと今後も語り合うことで、「このままでも自分はやっていける」という確信を揺り起こし、子どもたちと共有していきたい。

## 【参考文献】

「どもる君へ いま伝えたいこと」 伊藤伸二 著 解放出版社 2008

「親、教師、言語聴覚士が使える 吃音ワークブック どもるこどもの生き抜く力が育つ」

伊藤伸二 吃音を生きる子どもに同行する教師の会 編著 解放出版社 2010

「べてるの家の当事者研究」 浦河べてるの家 編 医学書院 2009

「吃音とともに豊かに生きる」 伊藤伸二 著 NPO法人・全国ことばを育む会 2013

「吃音の当事者研究—どもる人たちが べてるの家と出会った」

向谷地生良 伊藤伸二 著 金子書房 2013

「学習・どもりカルタ」吃音を生きる子どもに同行する教師の会 制作 日本吃音臨床研究会 2010

「第1回・2回親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会要項」 吃音講習会実行委員会 2012 2013